

## 連載 プロマネの現場から

### 第 84 回 ITマネージャの「言葉の杖」

蒼海憲治(大手 SI 企業・金融系プロジェクトマネージャ)

前回に続いてになりますが、1月の『IT技術者のウェルビーイング研究会』での『「プロマネの現場から」の著者が語る、プロジェクト・メンタル・プロセスとその極意とは』というテーマでお話しさせていただいた際、補足資料としては用意したものの、紹介できなかった、ITマネージャにとっての「言葉の杖」について、今回は紹介させていただきます。

システム構築の現場は決して楽ではありません。それは定型業務と異なり、プロジェクトの初期段階においては、何をどうやるかが必ずしも明確になっておらず、また、それに取り組むメンバーもその都度異なるため、コミュニケーションルートの構築からスタートする必要があります。それでも、なぜプロジェクトに取り組むのか、なぜあえて厳しいリーダをするのか、そこで頑張る意味とは何か疑問になった際、振り返り、また、それに鼓舞されて一步一步、歩みを進めるのが「言葉の杖」だと思っています。今回は、私自身が鼓舞されたITマネージャにとっての「言葉の杖」を、いくつか紹介したいと思います。

#### 1. なぜシステム構築に携わるのか？

自分がカテドラルを建てる人間にならなければ、意味がない。

「建築なった伽藍内の堂守や貸椅子係の職に就こうと考えるような人は、すでにその瞬間から敗北者であると。それに反して、何びとであれ、その胸中に建造すべき伽藍を抱いている者は、すでに勝利者なのである。」 (サン＝テグジュペリ『戦う操縦士』堀口大学訳)

#### 2. なぜプロマネ、リーダが必要なのか？

「専門家にはマネジャーが必要である」

「専門家が自らのアウトプットを他の人間の仕事と統合するうえで頼りにすべき者がマネジャーである。専門家が効果的であるためには、マネジャーの助けを必要とする。マネジャーは専門家のボスではない。」

(ドラッカー『マネジメント「エッセンシャル版」』)

### 3. 不公平・不平等と感じたら・・・

「人生はハンディキャップレースのようなものですからね……。しかも条件の悪い方に負の斤量が多いというモノスゴサ。」(黒鉄ヒロシ)

### 4. 自分にとっての選択や境遇に迷いが生じたら・・・

「一灯を提げて暗夜を行く、  
暗夜を憂うる勿れ、  
只一灯を頼め。」(佐藤一斉「言志晩録」)

### 5. メンバー育成の心得

プロジェクト・メンバーや部下育成において同僚のリーダーが座右の銘にしているのは、山本五十六が遺した数々の名言です。

人を動かす

「やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、  
ほめてやらねば、人は動かじ。」

なお、この有名なこの言葉には、続きがあります。

「話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず。  
やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず。」

さらに、山本五十六には、このような言葉も残っています。

実年者の態度

「実年者は、今どきの若い者などということを絶対に言うな。  
なぜなら、われわれ実年者が若かった時に同じことを言われたはずだ。」

今どきの若者は全くしょうがない、年長者に対して礼儀を知らぬ、道で会っても挨拶もしない、いったい日本はどうなるのだ、などと言われたものだ。

その若者が、こうして年を取ったまでだ。  
だから、実年者は若者が何をしたか、などと言うな。  
何ができるか、とその可能性を発見してやってくれ。」

## 6. 困難・トラブル・プロジェクトを前にして・・・

サラミスの海戦を目前にして動揺するギリシア兵に対するテミストクレスの演説・・・

「世の中には困難を前にして立ちすくむ者がいる一方、  
困難に挑んで闘志を燃やす者がいる・・・

そのときに何者であったかが、その後に何者として見られるかを定めることになるからだ。  
強い者と見られるか、弱い者と見られるか、  
有用な者と見られるか、無用の者と見られるか。  
勝者となって栄誉を掴むか、敗者となって恥辱を浴びるか・・・

アテナイ勢の兵士諸君、諸君がよいと思うほうを選べ」

## 7. 感受性のマネジメント

メンタル・タフネスやメンタル・マネジメントを考えると、思い出す詩といえば、

茨木のり子さんのこれになります。

自分の感受性くらい

ばさばさにかわいていく心を  
ひとのせいにはするな  
みずから水やりを怠っておいて

気難しくなってきたのを  
友人のせいにはするな  
しなやかさを失ったのはどちらなのか

苛立つのを  
近親のせいにはするな  
何もかもへたくそだったのはわたくし

初心消えかかるのを  
暮らしのせいにはするな  
そもそもが ひよわな志にすぎなかった

駄目なことの一切を  
時代のせいにはするな  
わずかに光る尊厳の放棄

自分の感受性くらい  
自分で守れ  
ばかものよ

## 8. 人生二度なし

最後は、森信三さんがおっしゃる「人生二度なし」という言葉になります。  
森さんのいう、「人生二度なし」には、3つの意味が込められているといいます。  
一つめは、人生は一回限りで、二度と同じ人生を歩むことができない。  
二つめは、この地上に同じ人間は二人としていない。  
三つめは、人生は有限であり、必ず終末がある、ということ。

「実際人生は二度ないですからね

人生は、ただ一回のマラソン競走みたいなものです。  
勝敗の決は一生にただ一回人生の終わりにあるだけです。  
しかしマラソン競走と考えている間は、まだ心にゆるみが出ます。  
人生が、50メートルの短距離競走だとわかってくると、人生の凄味が加わってくるんですが。」

以上、「言葉の杖」を紹介してきましたが、自分の足で立って歩かないかぎり、プロジェクトを推進することはできません。でも、負荷の大きい道のりであればあるほど、杖は非常に大切になっていると思っています。